

姉小路氏城館跡と 飛驒の中世



Exhibition Catalogue

飛驒市美術館企画展

はじめに

室町時代、現在の飛驒市古川町周辺は「飛驒国司」と称された姉小路氏が治め、多くの城が築かれた地域でした。特に、古川城・小島城・野口城・向小島城・小鷹利城の5ヶ所の山城は、以前より群として歴史的価値が高いと評価されていました。これらについて飛驒市では「姉小路氏城館跡」と総称し、国史跡指定を目指して各種調査を実施してきました。調査の結果、それぞれの山城を姉小路氏が築き、三木氏・金森氏と勢力が移り変わることごとに手を加えながら使用されたことが分かってきました。山城の移り変わりから飛驒全体の歴史の流れが分かり、さらに現在の地域構造のあり方についても、この時代を土台として培われたことが分かります。

本書は、姉小路氏城館跡の魅力を深く知つていただきためのガイドブックとして作成しました。最新技術を利用した測量調査、出土遺物を用いた編年の検討、史料を網羅した文献史料調査、地籍図を分析して景観復原を行つた歴史地理調査など、各調査の成果は今後の飛驒の中世史を語る上で重要な基礎資料となりました。本書ではその一部を紹介します。どのように城を調査して歴史的な価値を見出したか、感じていただけたら幸いです。



姉小路済継画像（左）・姉小路基綱画像（右）（個人蔵）

飛驒古川を駆けた武将たち

姉小路氏～飛驒国司家～

姉小路氏は、藤原北家小一条流の支流にあたる公家の一族です。南北朝時代、「飛驒国司」と称された藤原家綱の一族が飛驒に入り、古川盆地周辺を所領とします。15世紀前半には古川・小島・向(後に小鷹利に改姓)の3氏に分家します。古川城は古川氏の居城、小島城は小島氏の居城、向小島城・小鷹利城は向氏の居城と伝わります。このうち古川氏は京都で活動し、小島・向氏は飛驒を拠点に活動していました。古川氏の基綱・済継は当時の宮廷を代表する歌人として有名です。

戦国時代、姉小路氏は飛驒国の守護・京極氏の勢力と対立しつつ、3家同士でも争います。やがて古川氏・小鷹利氏は衰退し、16世紀中ごろに三木良頼が古川氏の名跡を継ぎます。小島氏は唯一、三木氏傘下の武将として存続します。天正13年(1585)、金森氏の飛驒侵攻以後は小島氏の活動も途絶え、名門・姉小路氏の家系は姿を消しました。



姉小路済継画像（個人蔵）

姉小路基綱画像（個人蔵）

三木氏～飛驒の戦国武将の筆頭～

三木氏はもともと、飛驒国守護・京極氏もしくは守護代・多賀氏の被官であったと考えられます。南飛驒の益田郡を拠点としていましたが、16世紀はじめごろ、直頼の代に高山盆地に進出します。直頼は、姉小路氏や江馬氏と関係し、徐々に影響力を強めて勢力を拡大します。衰退しつつあった姉小路氏の内紛に介入するなど、古川盆地にも勢力を伸ばします。

直頼の子、良頼の代になると、完全に姉小路氏を凌駕します。永禄3年(1560)、良頼は朝廷に奏上して正式に古川氏の名跡を継ぎます。16世紀後半、良頼の子自綱の代には織田信長に接近します。「八日町の戦い」で江馬輝盛を敗死させるなど、飛驒の武将の中でも抜きんでた存在となります。

ところが、天正13年に金森氏が飛驒に侵攻します。隠居していた自綱は京都で蟄居し、当主の秀綱は戦死します。三木氏は飛驒の領主としての姿を失いました。



三木自綱画像（千光寺蔵）

金森氏～三英傑に仕えた長近と増島城主・可重～

金森氏は美濃・土岐氏の支流とされ、長近は若くして織田信長に仕えました。その後、戦功により越前国大野郡に所領を得て、大野城を築きます。天正13年(1585)、羽柴秀吉の命で飛驒国に侵攻し、三木氏を滅ぼして飛驒を平定します。その後正式に飛驒国を拝領し、高山城を築きました。秀吉の死後は徳川家康に接近し、「関ヶ原の戦い」では東軍に参戦しました。

2代・可重は、美濃の武将・長屋氏に生まれ、長近の養子となります。父・長近とともに飛驒を平定すると、古川郷を与えられ、増島城を築城したとされます。「関ヶ原の戦い」の後、長近が隠居すると飛驒一国の采配を任せられました。長近・可重とともに茶道に優れました。金森氏は元禄5年(1692)、6代・頼昌の時代に出羽国上山(現在の山形県上山市)に移封となるまで、飛驒国を統治しました。



金森可重画像（林昌寺蔵）

金森長近画像（素玄寺蔵）

姉小路氏城館跡～領域支配の変遷～

飛驒の群雄割拠

飛驒地方は岐阜県北部に位置する自然豊かな山間地域です。中世には公家の出自で飛驒国司と称される姉小路氏が古川盆地(現在の飛驒市古川町周辺)に拠点を構え、高原郷(現在の飛驒市神岡町・高山市上宝町周辺)は国人領主・江馬氏が治めていました。古川郷の東隣に位置する広瀬郷(現在の高山市国府町周辺)は広瀬氏が治めていました。飛驒北西部に位置する白川郷周辺は内ヶ島氏が拠点としていました。高山盆地周辺や河上庄(川上川流域周辺)は寺社や貴族の荘園が点在していました。

室町時代、飛驒国守護は京極氏でした。京極氏は近江を本拠とし、飛驒以外にも出雲・隠岐など複数国の守護に補任されていました。京極氏の当主筋が飛驒を本拠とした記録は無く、守護代や被官人が職務を代行しました。15世紀後半、畿内で起こった「応仁・文明の乱」や「明応の政変」を契機に、飛驒においても守護権力や姉小路氏の勢力が衰えていきます。その中で勢力を拡大したのが三木氏です。三木氏はもともと守護もしくは守護代の被官人であったとされます。南飛驒を拠点としていましたが、16世紀の初めごろに高山盆地に進出し、やがて古川盆地を勢力下としました。三木氏は他の武将も下してさらに勢力を拡大していきます。しかし、天正13年(1585)の金森氏侵攻によって終焉を迎え、前後して他の在地領主も姿を消しました。



15世紀後半ごろにおける飛驒国の勢力図(想定)

姉小路氏の城館と変遷

古川盆地には姉小路氏の居城と伝わる城館跡が多数存在します。これらは時代によって支配勢力が変わると、城の使われ方も変化していきました。



飛驒市古川町周邊のおもな城館跡の位置

1 姉小路氏初期の拠点 [岡前館]

飛驒入国当初、姉小路氏は岡前館に入ったと考えられます。

2 分家後の各氏の拠点

[古川城(古川氏)、小島城・野口城(小島氏)、小鷹利城(向氏)など]

姉小路氏は3家に分家し、古川盆地を分割した3区それぞれに拠点を構築します。

3 三木氏傘下の山城に

[古川城、小島城、野口城、向小島城、小鷹利城]

16世紀中ごろ、古川盆地が三木氏の傘下となります。各拠点は三木氏の勢力下におかれ、一部は改修を受けます。

4 金森氏による統治 [古川城、小島城→増島城]

天正13年(1585)に金森氏が侵攻して飛驒を統一すると、国内の城は統合されています。古川盆地においては、当初は古川城・小島城が再利用され、最終的には増島城に拠点機能を集約して近世を迎えたものと想定されます。



古川盆地(南東から)

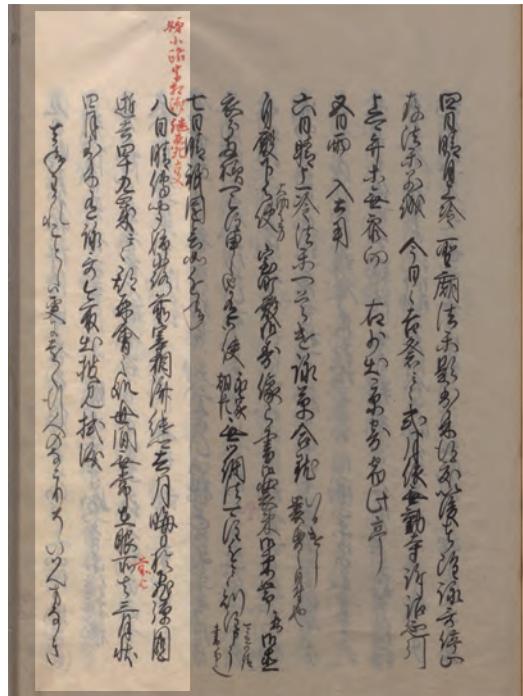
文献史料から見る古川盆地の中世

【姉小路・三木・金森へ領主の移り変わり～】

古文書や古記録といった文献史料からも、中世の古川盆地の勢力が時代によって移り変わったことが分かります。14世紀後半に公家の藤原家綱が「飛驒国司」に任じられます。この前後に家綱の家系は古川盆地を本拠とし、後に「飛驒国司家」等と呼称されるようになります。家綱の家系は15世紀はじめごろに古川・小島・向(後の小鷹利)の3家に分家します。当初は京都の本流と飛驒の3家という形でしたが、15世紀後半には古川氏が本流に代わって京都で活躍するようになり、「姉小路」と呼称されます。姉小路基綱・済継は歌人としても有名です。

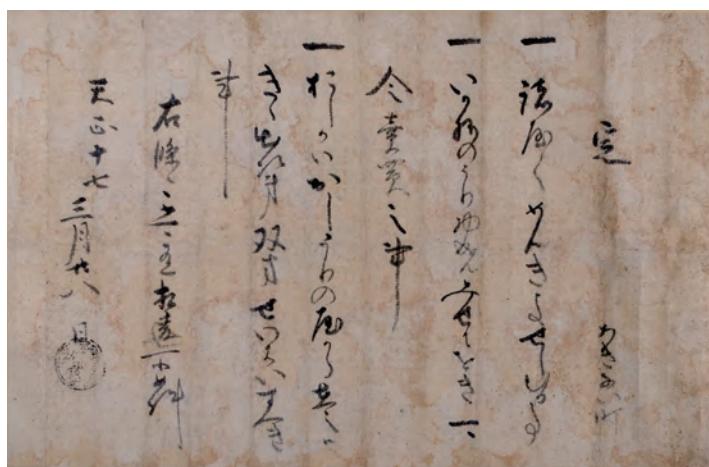
戦国時代に入ると、北飛驒の江馬氏や南飛驒の三木氏といった、実力のある国人領主の勢力が伸長します。姉小路3家は勢力を落とし、古川盆地は三木氏の傘下となります。永禄3年(1560)、衰退した古川氏の名跡を三木氏が継ぎます。このころ小鷹利氏も姿を消し、小島氏は三木氏傘下の武将として存続します。天正10年(1582)、三木自綱は「八日町の戦い」で江馬輝盛を破ります。

天正13年(1585)、羽柴秀吉の命を受けた金森長近・可重父子が飛驒に侵攻し、三木氏は駆逐されます。小島氏や江馬氏といった在地領主の姿も見えなくなり、飛驒は金森氏の領国として近世を迎えます。



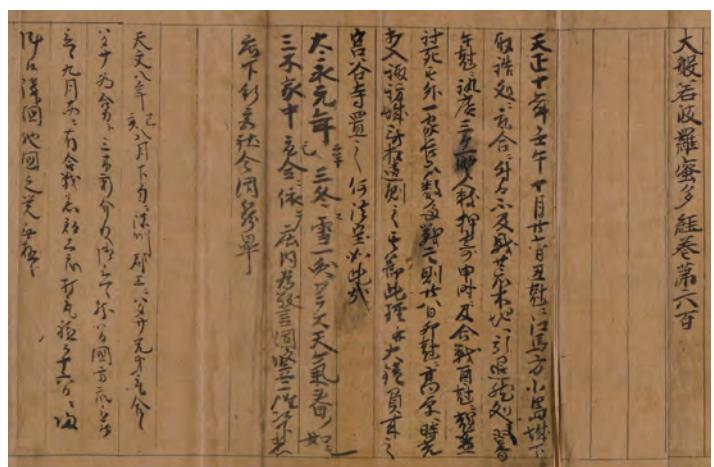
宣胤卿記（永正15年6月8日条、国立公文書館デジタルアーカイブ）

公家・中御門宣胤の日記。永正15年(1518)5月晦日に姉小路済継が飛驒で死去したことが書かれています。古川家の当主、基綱・済継・済俊の相次ぐ苦境・死去は飛驒国司家の衰退を物語る象徴的なできごとです。



天正17年 金森可重定書（飛驒市蔵）

金森氏が増島城下の「あきない町」に諸役(税金)免除等の決定を下したもの。この時点では増島城と城下町が既に存在していたと想定されます。



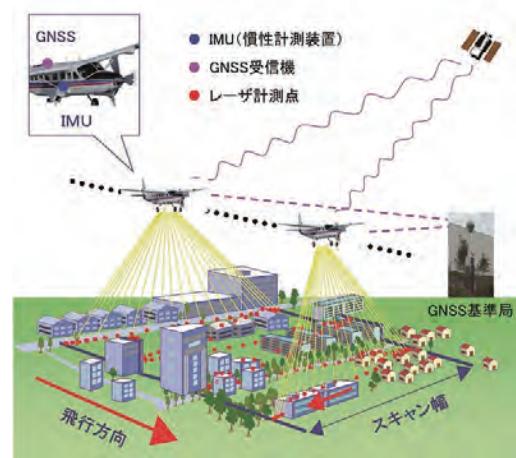
大般若波羅蜜多經 第600卷（寿楽寺蔵）

経典の奥書に歴史的事件に関する記事が記されています。この巻には大永元年(1521)の三木氏家中の争い、天文8年(1539)の三木氏の郡上出兵、天正10年(1582)の八日町の戦いについて書かれています。

赤色立体地図から見る姉小路氏城館跡

航空レーザ計測

飛驒市の城跡調査は、航空レーザ計測と赤色立体地図の技術を取り入れて行いました。航空レーザ計測とは、上空を飛行する航空機等に搭載した計測装置からレーザ光を発射し、光が地面から反射して戻ってくる時間差から距離を測る方法のことです。現地に立ち入らず、高密度かつ高精度な地表面のデータを取得できます。



航空レーザ計測の概念図（国土地理院ホームページより）

赤色立体地図

赤色立体地図は、レーザ計測で得られた細密で膨大な地表面のデータを表現した地図で、アジア航測（株）の特許技術が使用されています。赤色は人に立体感を感じさせるために有効な色彩とされ、この地図の技術により尾根は明るく、谷は暗く、急斜面は濃い色彩で表現されています。これらにより、山城の曲輪・堀切・堅堀等の正確な位置や規模のほか、樹木の中に隠れた微地形まで捉えることができるようになりました。飛驒市は、過去に岐阜県が実施した測量成果を利用しつつ追加で計測を行い、姉小路氏・江馬氏関連の城館跡、計15ヶ所について赤色立体地図を作成しました。



赤色立体地図（小島城跡主郭周辺）

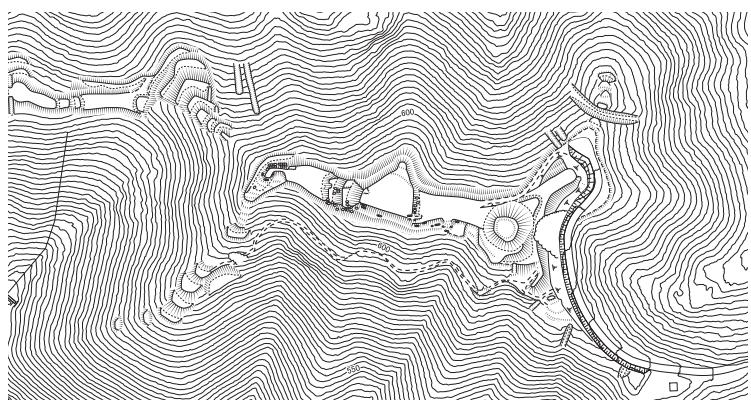
赤色立体地図を用いた山城の調査 ～飛驒市の場合～

赤色立体地図は、非常に緻密な地形情報を読み取れるという大きなメリットがあります。しかし、図に表示されている地形の凹凸であっても、実際は江戸時代以降の耕作地や現代の工作物であることがあります。そのため、赤色立体地図がそのまま城の図として使用できるわけではありません。図面を見て解釈を加えながら城の構造を理解する必要があります。

飛驒市では、正確かつ客観的に山城の構造を把握する手法として、従来から行われている縄張り研究に、赤色立体地図による検討を組み込む手法によって調査を行いました。調査では、赤色立体地図をもとに現地を歩いて遺構配置図（縄張り図）を作成します。この遺構配置図は城の構造を把握できるだけでなく、精度も安定しています。さらに、現地調査を効率よく行うことができるため、調査時間を大幅に短縮できるというメリットもあります。



赤色立体地図等をもとに実際に現地の山城を調査します。



赤色立体地図をもとに作成した縄張り図（小島城跡主郭周辺）

縄張りから見る姉小路氏城館跡

ダイナミックな城郭遺構が残る飛驒の山城

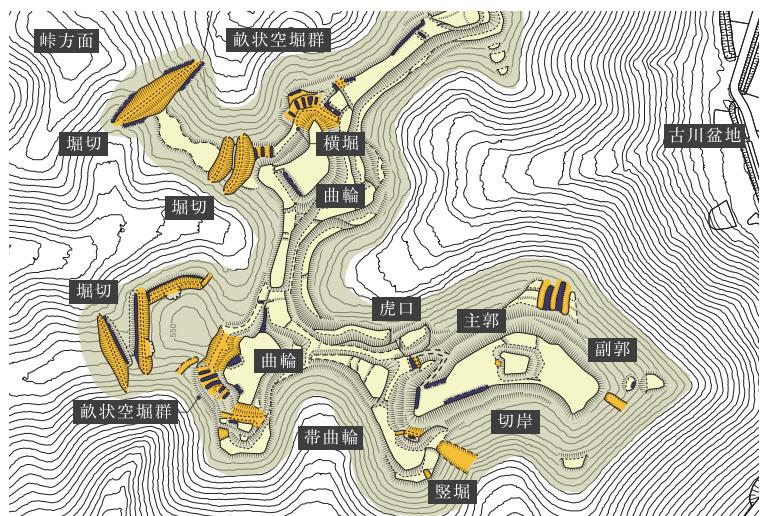
飛驒の山城を登ると、数百年前に作られた土木工事の跡が見えてきます。これらは「城郭遺構」と呼ばれ、地表にそのままの形で残っている場合があります。山城に配置された城郭遺構の全体構造は「縄張り」と呼ばれます。縄張りを理解することで戦国の世を体感することができます。ここでは、野口城を事例に山城の縄張りを見てみましょう。

自然の山を切り盛りして作った平坦な場所は「曲輪」(くるわ)と呼ばれます。最も高所にある広い曲輪を「主郭」と言い、城の中核区画に当たります。曲輪に「虎口」(こくぐち)という出入口を設ける場合があります。曲輪周辺には、「切岸」と呼ばれる人工的に造成された崖や、敵兵の移動を制限する「堀切」・「堅堀」・「横堀」などを設けて守りを固めます。堀切は尾根を分断させ、堅堀は斜面の横移動を防ぎます。横堀は曲輪などへの侵入を防ぎます。さらに、堅堀と土塁を畝の畝のように連続させる「畝状空堀群」(うねじょうくうぼぐん)を設ける場合があります。

山中を歩いていると突然現れる広い曲輪や巨大な堀切など、現地に残るダイナミックな城郭遺構が山城最大の魅力と言えるでしょう。



野口城復元イラスト



野口城遺構配置図

山城の石垣

古川盆地の山城のうち、一部の城に石垣を確認できます。同じ石垣でも構造や配置に違いが見られます。各時代の勢力が、それぞれ目的をもって石垣を作ったものと想定されます。



1 向小島城の発掘調査で発見された石垣です。主郭南側の切岸の造成にあたって、土留めとして築かれています。古くからこの地域に存在した土木技術を用いて作られたものと考えられます。



2 小島城主郭の東側斜面に残る石垣です。大きな石を垂直に近い角度で立て並べています。訪れる者にその威容を示すような、シンボル的な存在であったかもしれません。古川城にも同じような石垣が存在します。



3 小島城に残る櫓台の石垣です。隅部を見ると石材の短辺と長辺を交互に積む算木積みの技法が見えます。石垣の角度に傾斜をつけ、隙間に間詰石を詰めるなど、櫓のような重量物にも耐える構造です。織豊系城郭の石垣の特徴を持ちます。

発掘調査からみた姉小路氏城館跡

発掘調査で山城の年代と構造を調べる

山城には、造られた年代から現代の地面までの間に、いくつもの土の層が積み重なっています。発掘調査では、その積み重なった土が人の手による堆積か、風雨などが運んだ自然による堆積か、またそれがいつ堆積したかなどを慎重に判断しながら、現代の地面から順番に掘り進めます。姉小路氏城館跡の場合は、室町時代の地面まで掘り進めました。

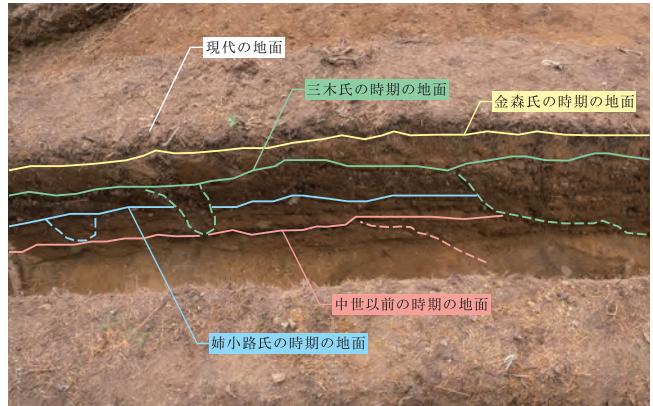
発掘調査で確認できるものを、「遺構」と「遺物」と言います。「遺構」とは、地面に残された痕跡です。柱を建てるときの基礎の石や掘った穴、また石垣などのことです。また、「遺物」とは、茶碗や土器など使っていた道具のことです。その両方が、どのような土の堆積からどのような状態で見つかるかを認識し、どの年代にどのような山城の姿であったかを考えます。さらに、山城の調査では、曲輪・堀切・土塁などの城郭遺構の堆積を把握し、どのように造りあげられたかを見極める必要もあります。

姉小路氏城館跡の一連の調査の中で、発掘調査に求められた役割は、縄張り図で確認した城郭遺構がどのように造られたのか、またその年代はいつだったのかを明らかにすることなのです。



小島城跡の発掘調査

現代の地面から掘り下げていき、金森氏の石垣が見つかりました。



古川城跡の主郭の発掘調査

姉小路氏、三木氏、金森氏と、それぞれの時代の地面が地下に残っていました。そこに残された遺構と遺物より、山城の造られた年代や山城の使われ方を突き止めました。



野口城跡の畝状空堀群の発掘調査

土塁は、両側に盛り土をしてから、中央を埋めるという順で、構築されたと判明しました。

地籍図からひも解く武家の拠点

明治時代の地籍図から中世の景観を復原

城の調査は、全体の構造や河川・街道・集落との関わり、時代による変化など、広い視野の検討を行うことができれば、より理解が深まります。その調査手法の一つが景観復原と呼ばれるものです。これは、古い絵図や地籍図を駆使し、地名や地形・発掘調査の成果などをミックスすることで、失われた施設を特定したり、古い時代の景観を再構成していくものです。

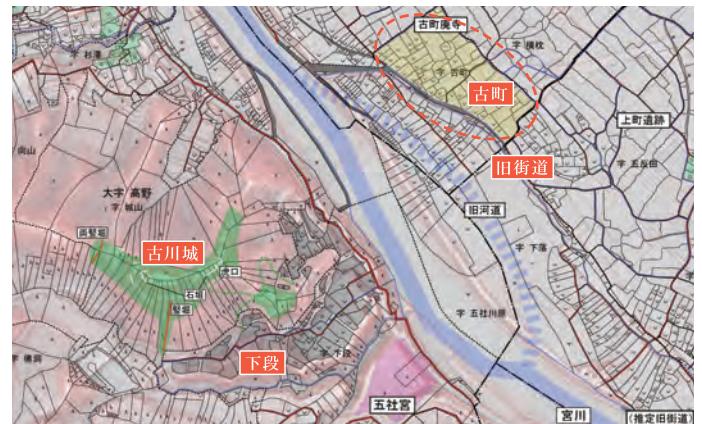
1. 姉小路氏の拠点づくり

姉小路氏が最初に拠点を築いたと考えられる場所が岡前館です。河川の氾濫による被害を避けるため、高台の河岸段丘に方形館を築いています。背後の谷筋には集落が存在します。周辺の遺跡の状況から、姉小路氏が飛驒に入る前からこの付近に人が居住していたと考えられます。さらに北側の山沿いに古い街道が通行します。姉小路氏は古くからある地域の形を踏襲しています。この段階では、家臣団屋敷や町場を伴う大規模な拠点作りをするまでに至らなかったようです。

飛驒市では、明治21年(1888)頃に飛驒地域で一斉に作成された地籍図を使用し、それぞれの城跡周辺の景観復原を行いました。その成果から、古川盆地における中世の景観の移り変わりを見てみましょう。



岡前館周辺景観復原図



古川城周辺景観復原図



増島城下町景観復原図



小島城周辺景観復原図

飛
驥
古
川
の
山
城



小鷹利城

岡前館跡

～姉小路氏最初の拠点と
目される居館～

所在地:飛驒市古川町杉崎・袈裟丸 使用した勢力:姉小路氏

立地:方形館

主な遺構:曲輪 土塁

時代:南北朝時代～室町時代

主な遺物:土師器皿 瀬戸美濃珠洲焼

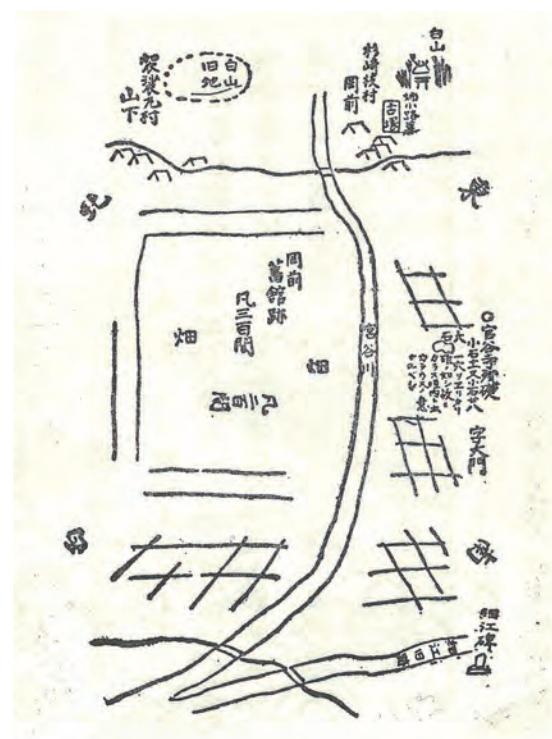
立地と歴史

岡前館は、姉小路氏の居館跡と伝わります。古川盆地の中部・宮川右岸の河岸段丘上に立地しています。後に築城される小島城と野口城の中間に位置します。北東部に縄文時代の集落遺跡が存在し、南東部に古代寺院の杉崎廃寺跡が存在します。この地は、姉小路氏以前の時代から人が居住していた地域でした。南部は宮川が流れ、さらに支流・宮谷川と細江川(旧流路)が合流していました。水運の中継地として最適の場所であったと考えられます。これまで発掘調査は実施していませんが、土師器皿や天目茶碗など、武家館としての利用が想定できる遺物を採取しています。

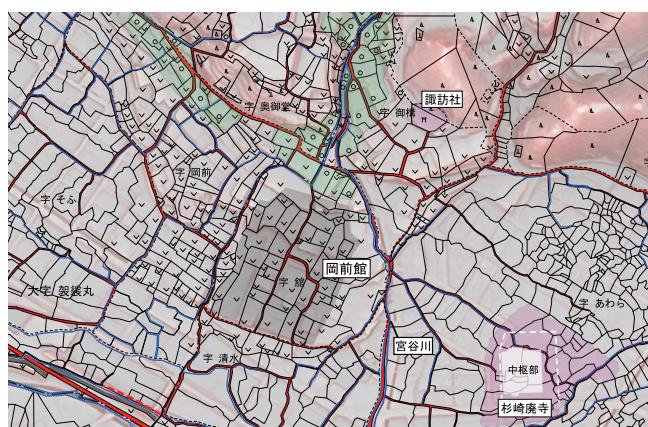
岡前館が築かれた年代は不明ですが、応安4年(1371)に飛驒国司の軍勢が越中に進軍して敗れる事件があり、永和4年(1378)に藤原家綱が「飛驒国司」と称されています。そのため、14世紀後半に家綱の勢力が飛驒に入ったものと想定され、岡前館の使用開始もこの時期に求めることができます。15世紀初めごろ、姉小路氏は古川・小島・向(後に小鷹利)の3氏に分家し、それぞれ拠点を築きます。岡前館の廃絶時期は不明ですが、周辺で採取した土師器皿の年代の検討から、16世紀に入ると使われなくなつたと想定されています。山城が使われる年代になつても、しばらくの間は何らかの利用がされていたと考えられます。



岡前館遠景(南東から)



『斐太後風土記』に描かれた岡前館周辺の様子



岡前館周辺景観復原図

城の構造

岡前館は単郭の方形館と考えられ、南北200×東西160メートル程の規模です。自然の河岸段丘を利用しているため、平面形状は完全な方形ではなく、不定形となっています。館内部は自然地形の小さな段丘に沿って3段に分かれています。内部構造や当時の建物の様子は未調査のため不明ですが、明治時代の地籍図を見ると、敷地南側の段丘崖に沿って古道が通り、そこから館中央部を南北に貫通する道が通っています。南側を正面として、中央部を通る動線であった可能性があります。

周辺の地名について

周辺には武家館や寺院をイメージする地名が残ります。武家館に関連する地名としては、館敷地の「館」をはじめ「岡前」「御構」があります。寺院との関係が想像できる地名として、「奥御堂」「祖父あん(時々庵)」等があります。また、この地域には天台宗の宮谷寺が存在したと伝わり、北東の諏訪神社近くには姉小路氏の墓と伝わる五輪塔群が存在します。詳細は不明ですが、岡前館を中心として中世の集落や宗教勢力のまとまりが想定され、姉小路氏の菩提寺も所在していた可能性があります。そうであれば、姉小路氏の拠点が山城に移った後も、父祖伝來の地として岡前館の周辺地域は重要視されたものと考えられます。

古川城跡

～古川氏の居城から

三木氏、金森氏の拠点へ～

所在地:岐阜県飛騨市古川町高野

使用した勢力:姉小路氏(古川氏)・
三木氏・金森氏

立地:山城

時代:室町時代～安土桃山時代

主な遺構:曲輪 土塁

主な遺物:土師器 濑戸美濃白磁
染付など

立地と歴史

古川城は、古川盆地の南東部、宮川左岸沿いの通称「城山」に立地します。山上に「蛤石」という特徴的な石が存在することから、「蛤城」とも呼ばれます。

古川城は姉小路氏の一家・吉川氏の居城でした。吉川氏を含む3家は、15世紀はじめごろに分家しました。応永18年(1411)、古川伊綱が幕府軍に討たれますが、古川氏は存続します。後継の昌家・基綱・濟継・濟俊は廷臣として京都で活動します。戦国時代に入ると古川氏は次第に勢力を落とし、基綱以降の当主は飛騨に下向します。享禄3・4年(1530・1531)には古川家中で内乱がおこり、古川城が落城します。この戦いでは、勢力を拡大していた三木氏の介入を招きます。

永禄3年(1560)、三木良頼は朝廷に奏上して正式に古川氏の名跡を継ぎます。このころに古川城も三木氏の勢力下に置かれたと考えられます。天正13年(1585)、金森氏が飛騨に侵攻し、三木氏を駆逐します。その後、金森氏は古川城に入城し、増島城が完成するまでの押さえとして使用したと伝わります。



古川城(東から)

城の構造

古川城は山上と山麓にそれぞれ曲輪群が確認できます。山上部は主郭を中心に尾根上や尾根沿いに曲輪・切岸・堅堀・堀切等を設けています。主郭の東側には、石垣を用いた舟形虎口が存在します。

主郭で実施した発掘調査の結果、5×3間の規模の礎石建物を確認しました。さらに主郭東側虎口の発掘調査によって、2時期の石垣が存在することが分かりました。調査で出土した遺物の年代を検討した結果、5×3間の建物は三木氏段階のものと想定され、虎口の石垣のうち新しいものは金森氏段階のものと想定されました。一方、古川氏段階の遺物も発見され、古川氏の利用も想定できました。古川城は伝承通り、この地を治めた武家勢力が時代を通して拠点としていたことが分かりました。

山麓地区(下段)には平坦地群を多数認めます。ここには城主居館や家臣団屋敷が存在したと伝わります。また、谷川を隔てた場所に、明治初期まで五社宮が存在していました。さらに宮川の対岸には「古町」という場所があり、ここにあった町が金森氏によって増島城下に移されたと伝わります。古川城を中心に要素がまとまって存在し、一体の拠点を形成していた地域構造が想定できます。



古川城遺構配置図

小島城跡

～小島氏居城から金森氏による
城下町建設の萌芽～

所在地:岐阜県飛騨市古川町沼町・
太江・杉崎
立地:山城
時代:室町時代～安土桃山時代
主な遺構:曲輪 虎口 堀切 堅堀
主な遺物:土師器 瀬戸美濃白磁
金属製品など

立地と歴史

小島城は姉小路氏の一家・小島氏の居城です。宮川とその支流・太江川に挟まれた山頂に立地します。15世紀のはじめごろに分家した小島氏は、宮川右岸地区の小島郷を領域としました。15世紀後半になると、守護・京極氏の勢力や、同族の向氏や古川氏と権益をめぐって争います。16世紀に入り、古川氏・向氏が勢力を落とす中、小島氏は三木氏の傘下となることで存続しました。

天正10年(1582)10月26日、北接する高原郷の領主・江馬輝盛の軍勢が小島城下に攻め寄せます。その翌日、荒城郷で三木氏と江馬氏の合戦が起こり、三木氏が勝利します(八日町の戦い)。直後、小島時光は三木氏の尖兵として高原郷に攻め入り、江馬氏の居城・高原諏訪城を落としています。天正13年(1585)、金森氏が飛騨に侵攻して三木氏が駆逐されると、小島氏の活動の記録も途絶えます。その後、金森氏が小島城に入城し、増島城完成までの押さえとして使用したと伝わります。



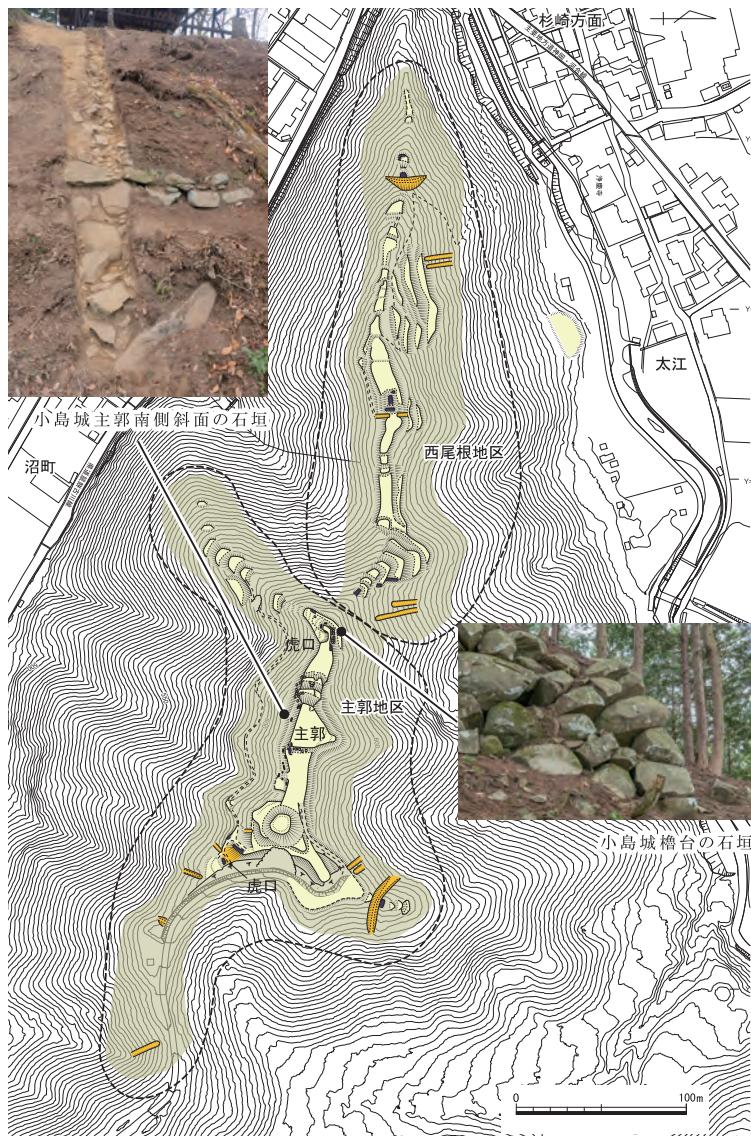
小島城(南から)

城の構造

小島城は、主郭を中心とした城郭遺構と、西尾根に分布する城郭遺構という2つのまとまりがあります。西尾根地区は曲輪や土塁・堀切といった城郭遺構で構成され、主郭地区はそれに加えて石垣や枒形虎口が見られます。城山全体に分布する土造りの城郭遺構は、小島氏が城主の段階で設けられたものと考えられます。一方、主郭の周辺に存在する石垣や枒形虎口は、隅部が算木積みであることや背面構造から織豊系城郭の要素が見えます。これらは金森氏段階のものと想定されます。

さらに景観復原によって、小島城周辺の様相が明らかになりました。北麓の太江地区は、小島氏以前から断続的に続く集落の構造が見え、西麓の杉崎地区にはまとまった町場の構造が見えます。南麓の沼町地区では、不完全ながらも金森氏が築いた高山や増島の城下町と同じ構造の街区設定が確認できます。これらから、小島氏段階の拠点が北麓を中心に営まれ、小島氏段階後期から金森氏段階にかけての拠点形成が西・南麓部に想定できます。

金森氏段階と想定される小島城の石垣は、西側・南側からの眺めを意識する位置に構築されています。そのため、金森氏は山城の改修と連動しながら城下町建設を行ったものと考えられます。しかし、南麓の街区設定は不完全なものであることから、利用は短期間で終わり、増島城下に拠点の機能を集約したものと考えられます。



小島城遺構配置図

野口城跡

～古川盆地の防衛を担う「境目の城」～

所在地:岐阜県飛騨市古川町野口・ 使用した勢力:姉小路氏(小島氏)か
襲裟丸

立地:山城 主な遺構:曲輪 虎口 堀切 堅堀
土塁 畝状空堀群など

時代:室町時代～安土桃山時代 主な遺物:土師器 濱戸美濃 青磁
金属製品など

立地と歴史

野口城は、古川盆地の北西端に位置します。越中に通じる越中西街道、数河峠を超えて高原郷に通じる街道、湯峰峠・保峠を通じて白川郷へ通じる街道など、複数の街道が付近で合流しています。また、向小島城・小鷹利城・小島城・古川城といった盆地内の他の城を望むことができます。西方面からの盆地の出入りを監視し、盆地内の他の城に情報を伝える重要な場所に立地しています。

野口城に関する中世の記録は無く、築城主や使用した勢力については分かっていません。江戸時代に編纂された『飛州志』にも「来由未詳」としか記載がありません。しかし、位置としては宮川右岸地域の小島郷にあることから、小島城や岡前館と同じく、小島氏の領域内の拠点であったと想定されます。小島氏が滅ぶ16世紀後半頃、野口城も廃城になったと考えられます。



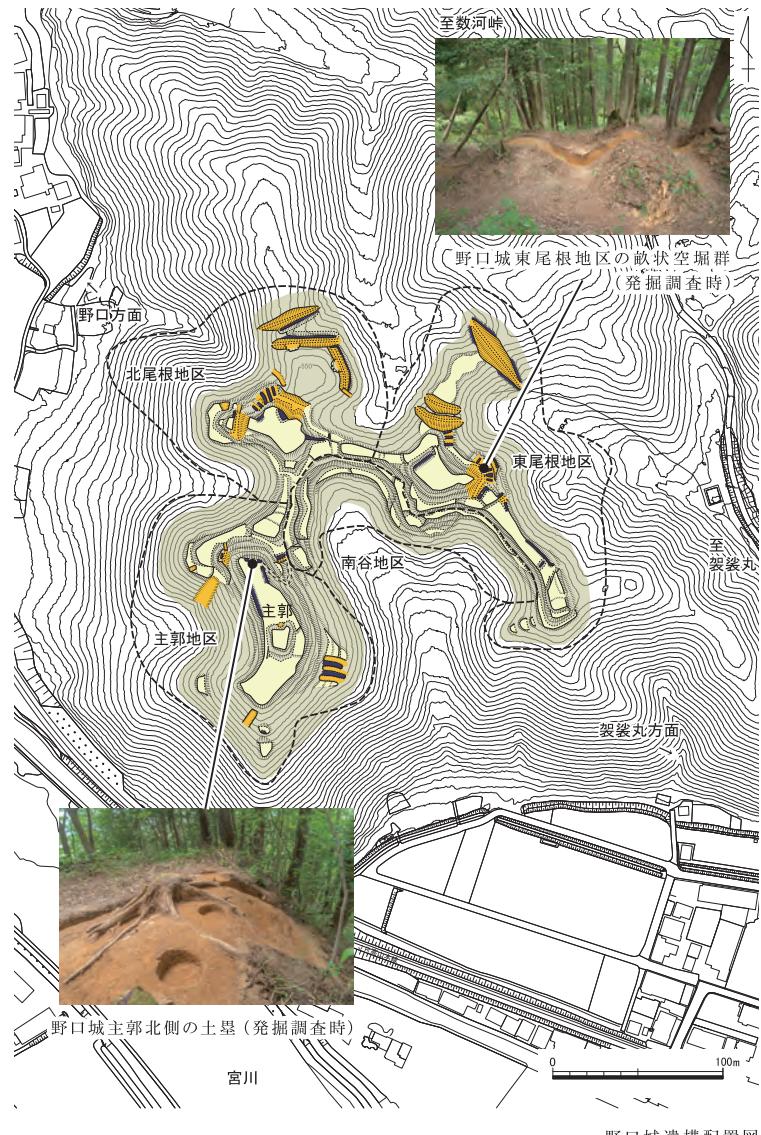
野口城（南から）

城の構造

野口城は、尾根伝いに連なる3ヶ所の山の頂上を利用して曲輪群が造成されています。盆地に最も近く、規模が大きい曲輪が主郭と想定されます。主郭において実施した発掘調査では、多数の土師器皿の破片や掘立柱建物を認めました。さらに曲輪の端に位置する土塁付近の調査では、柵と想定される柱穴列を認めました。

各頂上の曲輪を守るように、帯曲輪が取り巻き、さらにその周りには堀切・堅堀・切岸・横堀・土塁といった城郭遺構が配置されています。加えて峠方向の緩斜面に畝状空堀群が構築されています。畝状空堀群で行った発掘調査では、畝の両端を盛った後に中心部を埋めるという造成方法が判明しました。堀底から畝の頂点までは約1.3メートルを測り、横方向への移動は容易でなかったことが分かります。このように野口城の縄張りは、峠方向から来襲する敵に備えた構造です。歴史的には16世紀初めごろに姉小路氏と高原郷の領主・江馬氏が争う記録があり、16世紀後半には金森氏が飛騨に侵攻しています。このいずれかの段階で、盆地外の勢力に備えて改修が行われたものと考えられます。

さらに調査で出土した土師器皿等の遺物によって、それらを使用した築城期、古川盆地の出入りを厳重に監視するために畝状空堀群などを築いた時期という、2時期の利用が想定できます。



むかいこじまじょうあと 向小島城跡

～向氏拠点を見下ろす

ダイナミックな戦国山城～

所在地:岐阜県飛騨市古川町笛ヶ洞・
信包
立地:山城
時代:戦国時代～安土桃山時代
主な遺構:曲輪 虎口 堀切 竪堀
土塁 空堀群など
主な遺物:土師器 濱戸美濃 青磁
白磁 染付など

立地と歴史

向小島城は古川盆地の西部に位置します。越中に通じる越中西街道、白川郷方面に続く湯峰峠、小鳥峠を越えて郡上方面に続く街道といった、複数の街道を押さえる交通の要衝です。向氏(後の小鷹利氏)の居城と伝わり、本拠地と想定される信包集落を見下ろしています。

向氏は姉小路氏の一家で、15世紀の初め頃に分家しました。後に小鷹利郷と呼ばれる、古川盆地の西部から宮川左岸の下流域にかけての地域を所領としたと考えられます。16世紀に入ると、古川盆地は次第に三木氏の影響を受け、16世紀中頃に三木良頼が姉小路氏の一家・古川氏の名跡を継ぎます。小鷹利氏も領主としての活動の記録が見えなくなり、このころに向小島城は三木氏の勢力下に入ったものと想定されます。天正13年(1585)、金森氏が飛騨に侵攻した際、この城も戦いの舞台になったと伝わります。金森氏が飛騨を治めるようになると、向小島城は使われることなく廃城になったと考えられます。



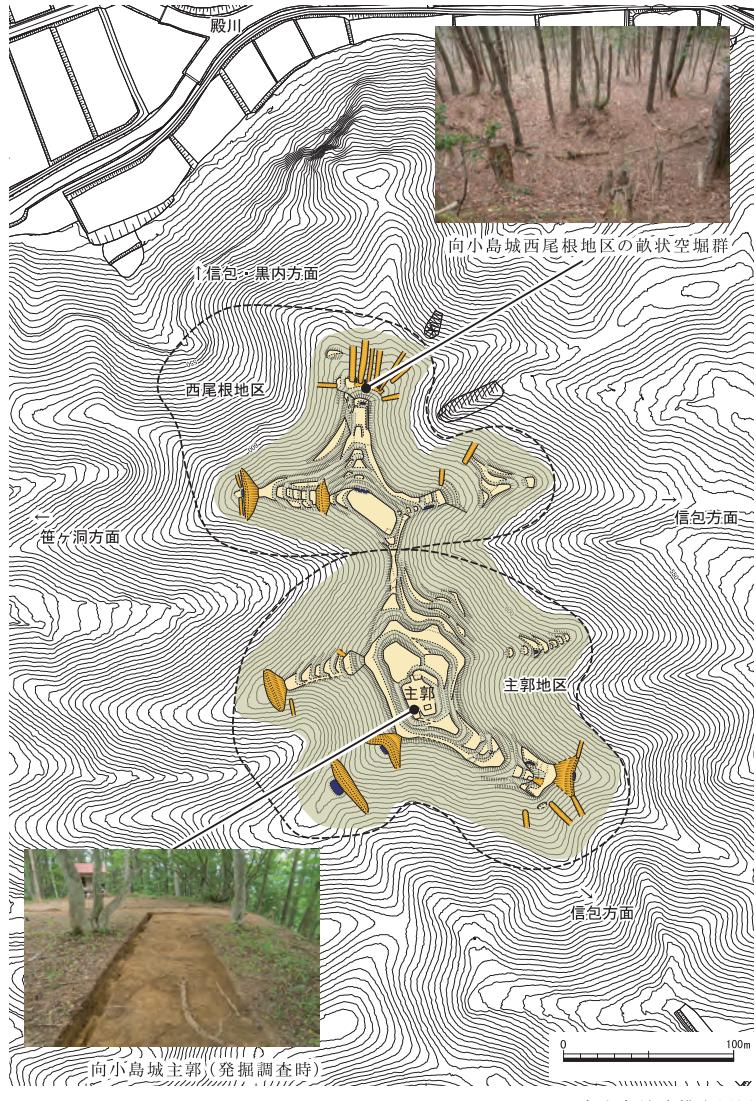
向小島城(西から)

城の構造

向小島城は二ヶ所の山頂にそれぞれ城郭遺構のまとまりがあります。このうち東側頂上部が主郭と想定されます。主郭は複数の帯曲輪や曲輪で囲まれ、東側・南側の尾根には複数の堀切が設けられています。主郭はよく削平されていますが、城全体として曲輪の削平は甘い箇所が多い状況です。そのため、城として使われた期間が他の城と比較すると短い可能性があります。

湯峰峠方向にあたる西尾根には、畝状空堀群が確認できます。畝状空堀群には横堀の他に切岸・土塁・曲輪が伴い、この城の中で特に厳重に守っている区画と言えます。峠に向けて配置する様子から、金森氏の侵攻に備えて三木氏方の武将が急遽構築した可能性があります。

主郭で行った発掘調査では、掘立柱建物を確認し、土師器皿や瀬戸美濃焼の丸皿や天目茶碗等が出土しました。そのため、一定期間は人が居住していたことが分かりました。さらに曲輪の造成状況を確認し、基底部に石垣を設けて南側切岸を急峻に造成していたことが判明しました。北側切岸の造成が甘いことや、北側尾根に堀切などの遮断を目的とした城郭遺構が配置されていない状況から、峠方向の西・南側を敵正面とし、本拠のある北側を自身の領域と捉えていたと考えられます。



向小島城主郭(発掘調査時)

向小島城遺構配置図

小鷹利城跡

～向氏の居城から金森軍迎撃の城へ～

所在地:岐阜県飛騨市古川町黒内・信包、河合町稲越
使用した勢力:姉小路氏(向氏)、三木氏

立地:山城

主な遺構:曲輪 虎口 堀切 堅堀
土塁 畝状空堀群など

時代:室町時代～戦国時代

主な遺物:土師器 瀬戸美濃
珠洲焼 青磁 白磁など

立地と歴史

小鷹利城は、向小島城と同じく向氏(後の小鷹利氏)の居城と伝わります。古川盆地の北西端に位置し、白川郷方面から古川盆地に至る湯峰峠が城の北側を通ります。古川盆地を一望し、向氏の領域や盆地内に存在する野口城・小島城といった山城を一望できます。

向氏は、15世紀の初め頃に姉小路氏から分家し、16世紀前半に小鷹利氏に改姓します。16世紀になると古川盆地は次第に三木氏の影響を受けます。16世紀中頃、三木良頼は姉小路氏の一家・古川氏の名跡を継ぎます。このころ、小鷹利氏も領主としての活動の記録が見えなくなり、小鷹利城も三木氏の勢力下に入ったものと想定されます。天正13年(1585)、金森氏が飛騨に侵攻した際、小鷹利城も戦いの舞台になったと伝わります。金森氏が飛騨を治めるようになると、程なくして小鷹利城は廃城になったと考えられます。



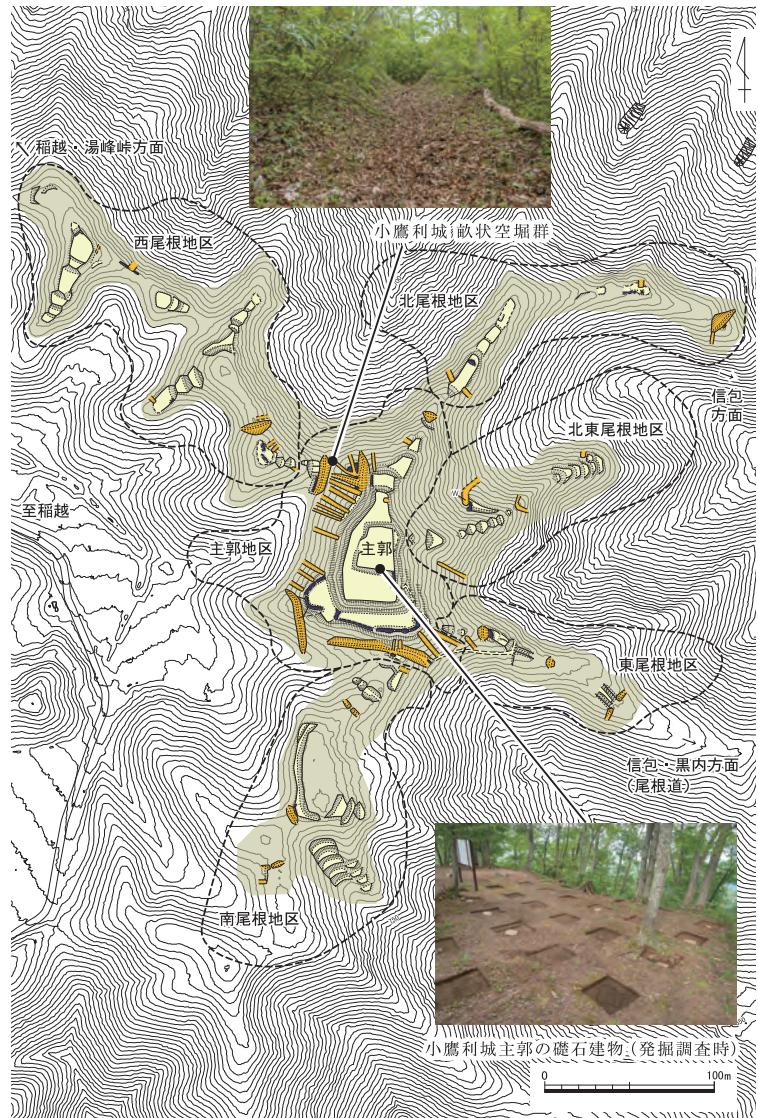
小鷹利城(北から)

城の構造

コの字状に巡る山塊のうち、最も盆地側に張り出した尾根の頂上が小鷹利城の主郭と想定されます。そこから派生するそれぞれの尾根に曲輪・堀切・堅堀といった城郭遺構を配置します。主郭の周りは複数の帯曲輪や曲輪で囲まれ、東側・南側の尾根には堀切が設けられています。曲輪や切岸は丁寧に造成され、帯曲輪の西側・南側の縁には土塁を巡らしています。さらに主郭西側の斜面に十数本の畝状空堀群を設け、南西側には土塁で保護した帯曲輪が張り出しています。これにより、斜面を登る敵に対して横矢をかける構造となっています。

東尾根を通行する尾根道は江戸時代の絵図でも認められる村境の道です。向氏拠点と想定される信包集落まで続いているため、当時の登城路であった可能性があります。このように小鷹利城の縄張りは、東側を自身の領域として捉えつつ、湯峰峠を超えて古川盆地に攻め入る敵を警戒した「境目の城」としての構造が読み取れます。

主郭で行った発掘調査では、2棟の礎石建物を確認しました。このうち1棟はL字の平面構造をした曲屋と考えられ、山城の建築遺構としては全国的に珍しいものです。同時に出土した遺物の年代から、この建物は向氏段階のものと考えられます。以上から向氏段階に山上で居住するような使われ方であったものが、三木氏段階では軍事要塞として利用されたものと想定されます。



小鷹利城遺構配置図

増島城跡

～飛驒古川の原点となった城～

所在地:岐阜県飛驒市古川町片原町

使用した勢力:金森氏

立地:平城

主な遺構:曲輪 虎口 石垣 堀
土塁 土橋 など

時代:安土桃山時代～江戸時代

主な遺物:陶磁器類 木製品 など

立地と歴史

増島城は、金森長近が飛驒国支配における古川盆地の押さえとして築いた平城です。古川盆地を流れる宮川と支流・荒城川の合流点に位置していることから、人や物資の移動を押さえる絶好の場所に立地していると言えます。天正13年(1585)、羽柴秀吉の命で飛驒に侵攻した長近は、その後正式に飛驒国を拝領します。

天正15年(1587)以降、長近は本拠・高山城の築城を開始し、さらに国内各地に支城を築きます。古川盆地には増島城を築き、養嫡子の可重を城主として置きました。元和元年(1615)、増島城は一国一城令によって廃城となり、金森氏の旅館(別邸)となります。元禄5年(1692)、金森氏が出羽国上山に移封になると、高山城とともに破却されたと考えられます。

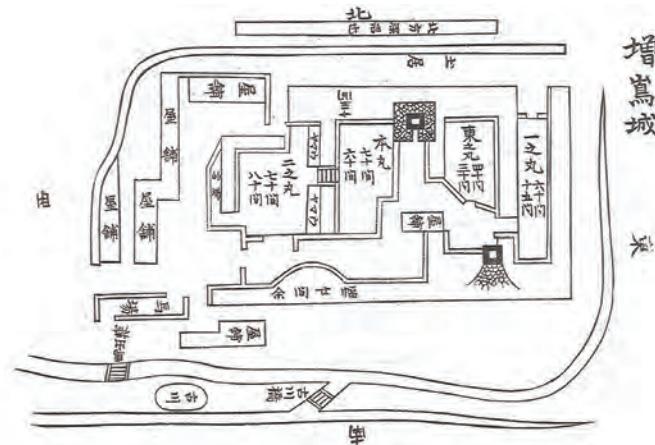


増島城本丸天守台(北東から)

城の構造

増島城は総石垣造りの城郭です。本丸を中心に複数の曲輪で構成され、各曲輪は水堀によって区切られていました。特徴的なのは本丸の外側に馬出(二之丸)が存在することです。これは同時期に豊臣秀吉が築いた聚楽第にも認められる形式で、当時最新鋭の築城思想を反映した城でした。

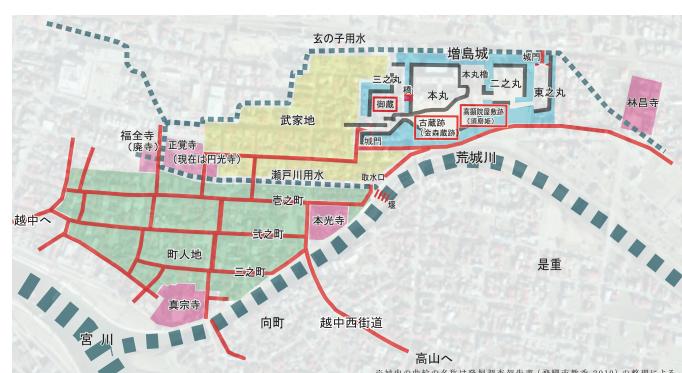
現在も見学できる本丸の櫓台は、東面を中心として当時の石垣の様相が残ります。自然石や割石を使用した野面積みで、南東隅には算木積みが確認できます。平成9～21年(1997～2009)にかけて、本丸・二之丸で実施した発掘調査では、曲輪を囲う石垣の他、土橋や虎口が発見されました。



増島城絵図(『飛州志』)



瀬戸川用水(武家地と町人地の境界) 増島城二之丸虎口の石垣(発掘調査時)



増島城下町模式図

城下町とその後

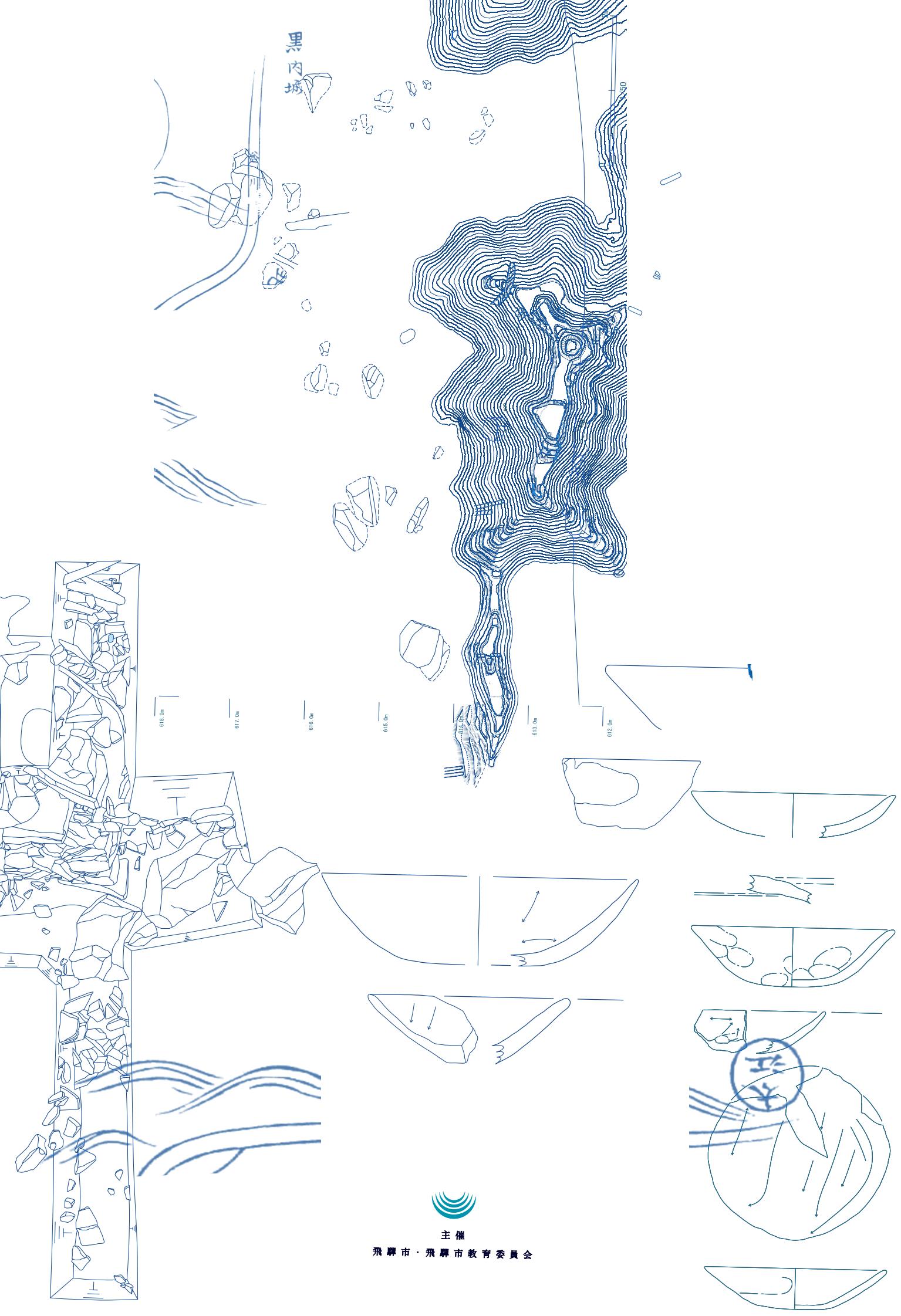
増島城とともに、城下町も整備されました。城と城下町は一体的な構造です。町場は武家地と町人地を分け、その境界として用水(現在の瀬戸川用水)が流れます。町人地は三本の道を基本とする計画的な街区設定がなされています。さらに町人地には高山と越中を繋ぐ越中西街道が通り、町の中に計画的に寺社を配置しています。これらは、金森氏本拠の高山城とよく似た構造です。金森氏は城だけではなく、町づくりについても当時最新の考え方を導入したことが分かります。

飛驒が幕府の直轄地となると、武家はいなくなり、屋敷跡は耕作地となりました。以後、古川は町人主体の在郷町として栄えます。このように、城や武家地など土地の使われ方は変化しながらも、金森氏の町づくりが原型となって今の飛驒古川が形作られたと言えます。

- ・本書は、飛騨市美術館において開催される令和5年度企画展「姉小路氏城館跡と飛騨の中世」(会期 令和5年10月21日～12月17日)の解説内容を紹介するパンフレットです。
- ・本書は「第1章 姉小路氏城館跡の全貌」の解説内容を紹介するものです。
- ・本書の企画・構成は飛騨市教育委員会文化振興課によるもので、執筆・編集は同課の大下永・三好清超で分担して行いました。
- ・画像の利用について、以下の方にご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます
(敬称略・五十音順)。
蒲茂太郎、寿楽寺、千光寺、素玄寺、林昌寺

令和5年度飛騨市美術館企画展
姉小路氏城館跡と飛騨の中世
解説パンフレット

発行日 令和5年10月21日
編集・発行 飛騨市教育委員会
制作 (株)M&Company



主催

飛騨市・飛騨市教育委員会